# ☆太王四神記☆　サリャン×キハ小説　『新・サリャン片恋物語』

るき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
☆太王四神記☆　サリャン×キハ小説　『新・サリャン片恋物語』

【Ｎコード】
Ｎ２４５７Ｉ

【作者名】
るき

【あらすじ】
暗殺者としてただ命令のままに人を殺める日々を送っていたサリャンは、幼いある女の子と出逢い、その世話を任される。大長老の命令で任務として接していたサリャンだが、次第にキハにその心を癒されていく。やがて成長したキハは神官見習いとして宮殿に入り、そこで出会った高句麗の王子と恋に落ちた。幸せそうな二人を陰でそっと見守るサリャン。キハの事は妹のように思っていたのだが……。大人に成長したキハを前にいつのまにか愛している事にサリャンは気付かずにはいられなかった。想いを胸に秘め、そし

て何があっても命を懸けて守ろうと誓う。従者が主に想いを抱く禁じられた片恋物語。※1話の前書きに「組織の説明と人物の紹介」を追加。

## ≪　1　≫（前書き）

～～「新・サリャン片恋物語」組織の説明と登場人物の紹介～～

←←　組織　←←

【火天会（ふぁちょんかい）】
虎族の末裔。アブルランサを拠点に組織が設立されて２０００年以上経つ。世界中の至る所に存在し、数百万人とその数は計り知れない。大長老を長に虎族の地の奪還を悲願とし、世界征服を企む。歴史を陰から操り、殺しを専門とする集団。

【虎族（とらぞく）】
２０００年前、大長老を長とし天の力の一部・火の力を使って地上を支配していた部族。熊族（くまぞく）を敵対とする。部族を統べる力のある女性を代々火の巫女としてきた。キハの前世・カジンはその中でも最も火の力を使う事に長けていたが、地上に降り立った神・ファヌンにその力を奪われる（正確には取り上げられた。）と共に地上の支配権を奪われた。ファヌンに恋をしたカジンに長老達は虐殺され、またその後の熊族との戦いで多くの同胞が命を落とした。カジンによって滅亡の危機に陥ったといっても過言ではない。

←←　登場人物　←←

【サリャン】……本作小説の主人公。
≪火天会戦闘部隊・隊長。大長老の側近の傍ら、２０年間キハの側近を務める。年齢不詳、推定３５歳。剣の名手。≫

暗殺者として組織の意のままに身を委ねていたがキハとの出逢いで心を癒され、現在ではキハを密かに想う。キハを利用しようとする組織との板挟みで苦悩し、キハの願いで過去に二度組織の意思とは反対の行動を取って大長老の怒りを買っている。キハがチュシンの王（タムドク）の子を身篭った時、キハとそのお腹の子を守る為に組織を捨てる決意をする。

【キハ】

≪虎族の火の巫女・カジンおよび朱雀の転生、火天会に朱雀の神器の守り主とされた。２５歳。朱雀の炎である火の力を使う。≫

５歳の時に火天会の襲撃に遭い誘拐され、大長老の手によって記憶を消された。組織の一員であるサリャンに火天会の人間として育てられ、幼い内から武術や学問・医学といった知識を身につける。１５歳の時に神官として入った宮殿でタムドクと相思相愛の仲になるが、１０年後のある事件がきっかけでその関係も終わりを告げた。のちにタムドクの子を身篭った事がわかり、子を守る為に全てを利用して生きようとする。幼い頃から傍に居てくれたサリャンを父のようにまた兄のように思い、記憶が戻ってからもその気持ちは変わらなかった。

【大長老】

≪虎族・火天会の大長老。年齢不詳、推定２０００歳以上。妖術を使う。≫

遥か太古に天の力の一部である火の力を盗み、妖術を得る代償に死を奪われ不死身の体に。妖術を手に入れた一方で自身で火の力を使う事が出来なかった為、虎族の女に火の巫女と称して代々その力を与えてきた。シンダンスに封印されている天の力を手に入れ、２００年前にファヌンによって奪われた虎族の地の奪還と共に世界征服を企む。キハの前世・カジンに異常な程の執着心を持つ。

## ≪ 1 ≫

チュシンの星が輝いた日の夜――――――。
城下は黒煙と炎に包まれ、悲鳴が飛び交っていた。
赤の装束に身を包んだ数千の火天会（ふぁちょんかい）は女・子供容赦なく逃げ惑う人々を斬り殺していく。

【 百済：チン城 】

城内に攻め込んだサリャン率いる火天会部隊は重臣と思われる者を捕らえ、サリャンは刀をその男の喉下に添えた。

「青龍の神器はどこにある？」
「……ヒ…っ、こ…殺さないでくれ……！どうか命だけは…ぁ……っ」
「どこに隠した」
「……ち、地下にっ……地下に秘密の祭室があってそこに祭られ――――――！」

男の喉下に添えた刀が肉に食い込むように深く斬り、男はそのまま絶命した。
血飛沫が上がり、サリャンは返り血を浴びた。

生ある者の命を奪う。
ただ命令のままに人を殺め続け、その繰り返し。
世界は赤く染まり、目に映る全てが血色だった。
いつから人の心を捨てたのか。

何も感じない。
心は冷たく、氷のように。

【　アブルランサ：祭室　】

幼い女の子の悲鳴が響く。
長老を始めサリャンもその様子をただ冷たく見ているだけだった。
肩には大長老によって火天会の烙印が焼かれ、女の子はそのまま倒れた。

２０００年火天会がその誕生を待ち望み探した火天会が崇めるべく火の巫女の生まれ変わり・朱雀の末裔。
朱雀の神器の光が上がり、火天会が攻め入った百済：サビ城から連れ去った女の子――――――名はキハ。

「サリャン、お前にキハ様の全てを任せる。しっかりと育てるように。利用するのだから」
「おおせのままに」

記憶を消され、意識を失ったキハは寝台に移された。
閉じていたキハの瞼が動き、ゆっくり目を開く。

「おはようございます。お目覚めですか、キハ様」
「……」
「今日よりキハ様の世話を申しつかったサリャンです。以後お見知りおきを」
「……サ…リャン、様？」
「どうか私の事は？サリャン”とお呼び下さい」
「……サリャ…ン？――――サリャンっ」

愛してはいけない人を愛してしまった。
永遠に実る事のない片恋だとわかっていても。
あなたを愛する事を止められなかった。
あなたに出逢わなかったら、
己の心に温かい風が吹く事はなかっただろう。
流す涙は温かくはなかっただろう。
あなたに出逢って愛を知る事が出来ました。

――――――――――――――――――――２０年後。

【　契丹：集落　】

胸からどす黒い血が溢れ、目の前は白く霞み……。
サリャンは死に逝く自身の身体をキハに預けた。
意識が遠のく。
腕に抱いたキハの温もり、鼓動、感じる全てに意識を集中させる。
これが最後だと――――――――……。

（……あなたが……好きです……）

サリャンはゆっくり瞼を閉じた。

思い出す。
その記憶のどれもが優しかった。

## ≪ 2 ≫

「私、大きくなったらサリャンのお嫁さんになるっ！」

――――――――それは遠い記憶。
キハが火天会（ふぁちょんかい）に連れて来られて一年。
アブルランサでの生活に慣れた頃、まだ6つの幼いキハがふと言った言葉だった。

「キハ様、そのような事は私のような者に言うものではありません。あなたは朱雀の神器の守り主で火の巫女、そして大地の母となられるお方。ですからキハ様にふさわしいそれ相応の者に…」
「私はサリャンがいいっ！もしかして……私が嫌いなの？」
「決してそのような事は。もちろん、好きでございます」
「あのね、私もサリャンも父様と母様がいない。でも結婚したら『家族』だよね？私にはサリャンが居て、サリャンには私が居るから世界で一人ぼっちじゃないの。寂しくなんかない」
「……キハ様……」
「私もサリャンが大好きよ。だからサリャンのお嫁さんになりたいの。サリャンは私をお嫁さんにしてくれないの…？」
「――――――――――――っ」
「？？どうしたの、サリャン。顔が赤い。お熱？」
「い、いえ…何も。そのようなお言葉、真に光栄でございます。では、こう致しましょう。キハ様が成長なさるまでに私はあなたにふさわしい者となるよう精進致します。ですから……、その…どうか私めをあなた様の夫にして下さいますか？」
「っうん！サリャン？もう一つお願いがあるの。ずっと一緒にいて――――――約束、だからね」

『サリャンのお嫁さんになるっ！』

子供の言う事だ。

『私もサリャンが大好きよ』

子供の言う事だ。

話を合わせた方が今後の為に都合がいい。

……でも。

自分の中に何か温かいものが広がった事にまだ気付かない。

血色しか知らなかった瞳が、

澄んでいくような気がしたのは気のせいか。

氷だった心がじわじわと、じわじわと。

『ずっと一緒にいて』

すがりつく小さな身体を抱き締めた。

穏やかな時間が流れる。

共に寝、共に起き、共に食べ、武術・学問を教えながら共に修行をし――――――――――。

不思議な感じがした。

キハとは大長老の命令でただ任務として接していただけなのに。

暗殺者として“殺し”が全てだった自分の中に　何かが浸食していくのを感じずにはいられなかった。

キハと共に過ごす日々が温かく――――――楽しく――――――。

“感情”そんなものは遠い昔に置いていったつもりだった。
冷たい心が、癒されていく。

温かな風が吹く月日はゆっくりと流れていった。

大長老の命(めい)で遠出をしたある日の夜。
数え切れないほどの星とただ一つの月が深夜の闇を照らす。
慣れた道、見慣れた光景。
だが、アブルランサの門にはいつもとは違う人影が見えた。

【 アブルランサ：門 】

不審者の侵入に備え、門には交代で常に三人の見張りが居るはず。
でもそこに居たのはあの時よりも少し成長したキハ一人だった。

「キハ様！どうしたのですか、こんな夜に！それに見張りはどうしたのです！？」
「今日は休んでもらったわ。あなたがもうすぐ帰ってくるって知らせが入って、ずっと待っていたの」
「私の――――――帰りを待っていたのですか？お一人で」

キハの手を見ると少し悴んでいるようだった。
冬ではないとはいえ、やはり深夜は冷える。
一体どのぐらいの時間ここに居たのだろうか。
キハの手を取り、暖めるようにその手を自分の両手の中に包み込んだ。

「お手が冷たいです。大丈夫ですか？」
「平気よ、このくらい」
「ずっと待っていてくれたのですね」
「そうよ、いやだった？」
「いえ、ありがとうございます。でもお一人でというのは止めて下さい、危険です。いつどんな輩が襲ってくるかわからない。キハ様にもしもの事があれば申し開きが出来ません。これからは見張りの者も共に」
「わかった。これからはそうする。心配した？」
「肝が冷えました」
「そう。フフフ」
「笑い事ではありませんよ」
「ごめんなさい。サリャンの焦った顔、初めて見た気がするから。言うのが遅くなったけど――――――お帰りなさい」

彼女の見せる笑顔はとても優しくて。

誰かが。

「ただいま戻りました、キハ様」

誰かが待ってくれているのは、こんなにも嬉しいものなのか。
遠出をし、帰ればいつもキハが出迎えてくれる。
それは幾度となく続いた。

時は流れ、１５歳となったキハは神官見習いとして宮殿に入る事となった。
アブルランサでキハが過ごす最後の夜。

【　アブルランサ：サリャン書斎兼寝室　】

隊長の身として何かと忙しい。
小さな明かりを灯して、サリャンはこの日も夜遅くまで仕事をしていた。

コンコン――――――――――、遠慮がちに扉を叩く音がした。

「キハだけど。サリャン、起きてる？」
「どうぞお入り下さい」

扉を開け、枕を持った寝巻き姿のキハが入ってくる。

「どうかなさいましたか？明日は早朝にここを発たねばなりません。もうお休みになられないと」
「サリャンはまだ仕事？寝ないの？」
「今ちょうど片付きました。私も寝るところです」

嘘だった。
本当はまだやる事あったのだが、キハの様子がおかしい事に気付き、仕事は明日以降に回す事にした。

「そう、よかった。ねぇ、一緒に寝てもいい？」

キハも女の子。
いつまでも同じ部屋・同じ寝台で寝るわけにはいかず。
８つの時にはキハは私室を与えられ、就寝は別々だった。

「キハ様がお望みならば。私は床で寝ますのでキハ様はどうぞ寝台でお休みになって下さい」
「どうしてあなたが床で寝るのよ。そんな事をしたら風邪を引いてしまうわ。同じ布団に入るのっ」
「――――――は？」
「キハ様がお望みならばって言ったのは誰？」
「私です。しかし、」
「なら決まりね」

すたすたと歩き、寝台に横になるキハ。
思ってもみなかった申し出にあっけに取られる。

「小さい頃みたいに一緒に寝たいの。だめ？」
「――――――――――」

強がっているようで実は寂しいと素直に言えないキハが妙に可愛く思えた。

「……サリャン？」
「本当に、キハ様にはかないません。わかりました、そのように致しましょう。では失礼致します」

一礼し、一人分空いていたキハの隣に横になった。

キハは火天会に連れて来られて最初の頃は、警戒してかサリャン以外の誰にも心を開かなかった。
特に大長老にいたっては本能的に恐れていた。
闇が怖いのだろうか、夜も中々寝ようとせず。
同じ布団に入り、様々な物語を聞かせて寝かしつけた事があった。
こうして一緒に寝るのは本当に久し振りで懐かしく思う。

「サリャン」
「はい」
「宮殿に入ったら……もうこうして毎日会えないのね…」
小さくつぶやいたキハの声はとても寂しそうだった。
「しばらくは。でもご安心下さい。その内こっそり忍び込みます。一人になった時に私の名をお呼び下さい。すぐキハ様の元に」
「出来るの？クンネ城は警備が厳重って聞いたわ」
「私を誰だとお思いですか？」
「……そう、ね。サリャンなら簡単な事ね」
「はい。姿が見えなくてもキハ様の傍に必ず居ますから」
「……本当に？」
「はい。だから安心して宮殿へ――――――」
言葉を遮られる。
キハがしがみ付いたからだった。
深く俯いていて顔が見えない。
でも微かに身体が震えているように思えた。
「サリャン……私。本当は……」
何て言ったのか、あまりにも小さな声で最後は聞き取れなかった。
？　ずっとここに居たい　”
「申し訳ございません。もう一度おっしゃって下――――キハ様？」
寝息が聞こえる。

どうやら眠ったらしかった。
「……私のキハ様。このサリャン、どんな時でも必ずあなたのお傍に」
起こさぬように。
そっと髪に口付けた。

スパイとしてキハを送り込むという組織の思惑通り、キハは神官見習いとして宮殿に入った。
最初こそ戸惑っていたものの、その生活にもすぐに慣れ、
そして――――――。
キハはそこで出逢った高句麗の王子・タムドクに恋をした。

【 クンネ城城下：火天会隠れ住まい 】

「私、太子様が好きなの。太子様は私の事どう思っているかしら」
「きっと太子様もキハ様と同じ気持ちですよ」
「そうだといいのだけれど…。サリャンには好きな人いる？」
幼さゆえか寂しさからだったのか、あの時交わした誓いは覚えてはいないようだった。
もちろん子供の言う事だと本気にはしていなかったが。
でもなぜだろうか、少し寂しかった。
「――――――いますよ、もちろん」
「誰？どんな人？」
「秘密です」

「誰なの？ねぇ、教えてっ」
「気になりますか？」
「あたりまえじゃない！もう何年一緒に居るのよ」
自分には向けた事のない笑顔をあの者には向ける。
私の知らないキハ様。
だから少しだけ、
「私の想い人はすぐ近くに居ます。それも目の前に」
いじめてみたくなった。
「……え…？それって…」
「キハ様です」
「――――――――っ」
頬を染め、目を逸らすキハが可愛かった。
「フフ。失礼しました、冗談です。本気にしましたか？」
「も、もう……っ！サリャンのいじわるー！！」
「申し訳ございません。でも好きなのは本当ですよ」
その言葉に嘘偽りはない。
もう赤の他人だとは思えない存在になっていた。
『家族』。
そうなのだろうか？いや、きっとそうなのだろう。
血の繋がりがなくても。
キハ様の事は妹として――――――。

妹として……？

『　　』

デハ、コノ？気持チ”ハ何ナノカ。
ワカラナイ……ワカラナイ……。

キハとタムドクは――――――恋仲となった。

## ≪ 3 ≫

時の流れと共に、キハは女性らしくどんどん綺麗になっていく。
神官見習いから正式に神官になったキハはもうすっかり大人になり、
歳は２５になっていた。
それと同時にキハとタムドクの恋も大人のものに変わっていた。
二人で居る時のキハの笑顔はとても眩しく。
とても幸せそうで――――――。

でもその幸せは長くは続かなかった。

【　クンネ城城下：火天会隠れ住まい　】

「私は…太子様が好きなの。ただ一緒に居たいだけなのに……っ」

輝いていた幸せは黒い陰謀の渦に飲み込まれていく。
キハの願いで逃避の準備が整うまでタムドクを匿う住まいを難民村に用意させた。

【　クンネ城近郊：難民村　】

ここでキハ様とタムドクは一夜を……。

それが意味する事は何なのか、どんなに否定してもそこにあるのは事実だけだった。

「……」

村の外には火天会の隊員が数十名待機している。
大長老の命(めい)で隙を見てタムドクを襲撃する為だ。
自分と部下二名であの建物が見える二軒隣の物陰から監視をしていた。

「……キハ様……」

背を向け、静かにその場から立ち去る。

「サリャン様。どちらにお行きですか」
「退きあげる。村の外でお待ちしろ」
「しかし、大長老様から目を離すなとのご命令です」
「――――――――」

二名の部下は一礼し、闇に消えた。

『 大きくなったらサリャンのお嫁さんになるっ！ 』

『 私もサリャンが大好きよ 』

ざあぁぁぁ――――――――――――風が吹き、木々がざわめく。

『 大好きよ 』

「……キハ様…私は……ッ」

妹だ、妹だ！
キハ様は妹だ！

――――――　大切に想うのは　どうして？

守りたいと思うのは　どうして？

妹だ、キハ様は妹だ！

アイシテイル

妹だからこんな想いを抱いては……！

――――――どうしてこんなにも　苦しいのか、胸が痛むのか。

アイシテイル

あいしている　……

愛している、から……？愛している？――――――愛している。

「もう――――私には、あなたを？妹”と思う事は出来ません……
……」

いつからだろうか。
妹だったのに、いつの間にか女性として見ていた。
それを妹と思い込む事でずっとこの想いを誤魔化していた。

キハ様を愛している。

……でも。
私はキハ様を利用した火天会の一員。
そしてキハ様には組織の人間として接触した。
任務として接し、組織の為に利用した。
たとえ後に気持ちが変わろうとも最初はそうだった。

だから――――――――。
想いを伝える資格など……私にはない。
それにキハ様が慕っているのは――――――。
でも、それでも。

「……キハ様を……愛している」

許されるだろうか？
せめて、想う事だけは。

「……あなたを愛する事を、どうかお許し下さい」

もう自分の気持ちに嘘をつけない。

「――――――キハ様、あなたが好きです……」

胸に秘めたこの想いが永遠に伝わる事はなくても。
あなたの想いが私に向く事はなくても。

あなたを想って愛せるだけで幸せです。
傍に居るだけで私は幸せです。

数日後。
国王暗殺を実行せよ、大長老の命（めい）が下る。
ヤン王、タムドクの父だった。
サリャンを筆頭に火天会部隊はクンネ城に攻め入った。

## ≪ 4 ≫

天はどうしてキハ様に過酷な運命をお与えになったのか。
宿命か？天命か？なぜ、キハ様を選んだのか。

霊廟に逃げ込んだ国王はチュモ神剣を胸に刺して自ら命を絶った。
密室のその場に居合わせたキハは国王暗殺の容疑をかけられ――――――――。
あの人だけはきっと信じてくれる、キハはそう思っていた。
だが、タムドクはキハを信じなかった。
冷たく降る雨の中、強く結ばれていたはずの絆はガラガラと音を立てて崩れていった。

【 クンネ城城下：火天会（ふぁちょんかい）隠れ住まい 】

泣いている。
キハ様が泣いている。
傷付いて悲しんでいる姿を、そんな姿を見たくはない……。
あなたの涙を見るのは――――――――。
泣いているキハにそっと手を伸ばす。
「――――――――――っ……」
伸ばした手は、途中で空（くう）を切った。

目を閉じる。

何をしようと考えていた……？
抱き締めた後はどうするつもりだった？

私には。
あなたを抱き締める事は出来ない。
想いを持って触れる事は決して許されない。

キハ様を抱き締めたい。
この手でそれが出来たらどんなにいいか。

私ならキハ様を泣かせない。
悲しませたりはしない。
ずっと傍に居るのに。

――――――そしてキハはタムドクの子を身篭った。

キハ様がかつて幼い頃に欲した『家族』。
血の繋がりがある本当の家族。
たとえ父親が誰であろうと愛する人の子であるなら。
キハ様のお腹の子が、愛しい。

「サリャン。私、この子を守りたいの」

キハが身篭ったのは天孫の血を引く、チュシンの王の子。
男子が生まれれば、シンダンスの封印を解く為の贄としてその心臓を取り出される。

キハ様の子は火天会と大長老によって殺される。
――――――――だから。

「キハ様のお子様ならば、私の命にかえてもお守り致します」

火天会を捨てる。

?決意”に迷いなどない。
私の命をあなたに捧げましょう。

組織への裏切りは『死』。
殺され、命尽きる事になっても……それでも。
愛する者の為に死ねるのなら悔いはない。

キハ様とお腹のお子様を必ず守る、私の命と引き換えに――――――。

そして、とうとうその日がやってくる。
サリャンは願った。
男の子であったなら殺さなければならない、そういう命(めい)だ。
だから、どうか女の子であるようにと。

キハは――――――男の子を出産した。

【　契丹：集落　】

キハ様の妹君、名はスジニと言っただろうか。
去っていくその後姿に深く頭を下げた。

「どうか……キハ様のお子様を頼みます」

これで私は殺される。
キハ様が次に目を覚ました時には私はもうこの世には居ない。
せめてもの救いはお子様を抱けた事か。
可愛くて、愛しくて、キハ様と同じように温かくて。

「さようなら……キハ様　……」

眠るキハに別れを告げた。

もう後戻りは出来ない。
――――――小箱に、偽の心臓を入れた。

≪ **5** ≫

「………………。これは一体、どういう事だ…………？」

怒りに満ちた大長老の声が発せられる。
大長老が小箱を開けると中には血の液体が入っていた。

“天孫の血を引く者以外の心臓を入れると溶けて血の液体になる。”

「貴様………忠誠を誓った身でありながら、このワシを――――――裏切ったのか………？」
「そうです。私をキハ様の側近にしたのがあなたの間違いでした、大長老様。それにさっき“忠誠を誓った”とおっしゃいましたか。勘違いしないで頂きたい。私が真に忠誠を誓った方はただお一人……！！あなたではない！！！！」
「！！！！！！！！！！！！！」

死、それが組織を裏切った者の末路。
生きる事は許されない。

赤い鮮血が飛ぶ。
胸には刀が突き刺さり、どす黒い血が溢れた。

――――――――――キハ様

その一瞬に浮かんだのは命をかけて守ると誓った大切な者の姿だった。

サリャンに致命傷を負わせたと確認した大長老はどこかへ去っていった。

「……っ…ぐ……ぁ……」

胸に突き刺さった刀を抜く。
勢いよく流れ出た大量の血は辺り一面に真っ赤な海を作った。
激痛が全身を襲い、呼吸が荒くなる。
立っている事が出来ず、建物に寄りかかるようにして座り込んだ。

「……申し訳…ございません……キハ様……。どうやら私は……っ……ここまでの……ようです……」

『ずっと一緒に居て――――――約束、だからね』

遠い昔に交わしたキハとの約束。
その声が思い出せば今でも鮮明に聞こえる。

「……あなたとの約束は――――――守れそうに……ありません……」

力なくつぶやき、空を見上げた。
黒い雲に覆われた夜空は星一つなく、今にも雨が降り出しそうで。

「もうすぐ私は……死ぬのか……」

とても静かだ――――――――――――――――。
この血の量ではもう助からないだろう。
でも、後悔はしていない。
大切な人を守って、大切な人の為に死ねるのだから……。
……死ぬ……？
本当に、このまま死んでもいいのか？
まだやる事が、伝えなければならない事があるのではないのか？
「……愚かだ、私は……っ」
まだ、役目は果たせていないではないか。
お子様が生きている事を伝えなければ。
まだ――――――死ぬわけには、いかない。
胸から血が溢れ、止まらない。
何とか身体を起こそうとしたが、血のぬめりが邪魔をする。
動いた事で新たに血が溢れ、痛みは更に増した。
力が入らず、もうどうにもならなかった。
死に、より近づいていくのを感じた。
――――――もう少しだけ……、私に時間を下さい……
……どうか。
空を見上げ、願う。
まだ死ねないのだと。
その時。

「私の子……っ！私の子はどこなの！どこに居るの……っ！？」
耳を疑った。
ああ――――――もう、聞く事が出来ないかもしれないと思っていた声。
「……ハ様っ……キハ…様」
子供を探すキハが自分の目の前を通り過ぎようとする。
痛みをこらえ、必死に呼び止めた。
「……キハ様……っ！！キハ様！！！」
「――――――？サリャ……ン？」
通じたのか、呼びかけた声にキハが振り向き、駆け寄ってきた。
「サリャン……！子供が……子供が居ないのっ！さっきまでお腹に居たのに、居ないの！！！」
「キハ様」
「どこに行ったの？！どうして居ないの？！なんでっ！！」
「落ち着いて下さい、キハ様っ！」
「……まさか……、あの化け物に？ねぇ、サリャン……何か知っているんでしょ！？教えて、子供は……！！」
「キハ様っ！！！！」
「――――――――――？」
「お子様は、生きています！」
「……え……？」
「キハ様のお子様は、生きています。あなたの……っ妹君に託して、逃がしました」

「生き……てる、の？」
「はい、ご無事です。あなたの命令もなしに勝手に行動した事、申し訳ございません。……結果的にあなたと…お子様を引き離すような事を。もしお怒りならば……この場で、どうか私を罰して下さい……」
「い、生きてる……私の子供、私の」
「――――――キハ様、ご出産……おめでとうございます。元気な、可愛い男の子……です、よ……」
一瞬、意識が飛びそうになる。
伝える事が出来た、お子様は生きていると。
これで――――――――――――私の役目は終わった。
「……っ…ありがと……サリャン。私の子供、守ってくれて……本当にありがとう……っ」
火天会（ふぁちょんかい）から子供を必死に守ろうとしたキハ様なら、きっと大丈夫だ。
自分が傍に居なくても、子の為に生きてくれる。
これでもう――――――――――――安心して逝く事が出来る……。
「――――――！？サリャン……っ、これは…どうしたの？」
今も止め処なく身体から流れる血。
それを見てキハは血相を変えた。
サリャンはそんなキハを安心させるように優しく微笑んだ。
「…私は……大長老様にキハ様の子を殺すように命令されていまし

た……。シンダンスの……封印を解く為の贄(にえ)として、その心臓を持ってくるようにと……」
「組織を――――裏切ったの？私の為に、私の子供を守る為に？そんな事をしたら……殺され――――」
全てを察したキハは力なく俯く。
その瞳からは涙が零れた。

「ごめ、ごめん……なさい、ごめんなさい……！私の所為でこんな事に！！ごめんなさい……っ…！！」
「どうか、ご自分を責めないで下さい。泣かないで。これは私がしたかった事なのだから……」

自分の命と引き換えに、守る。
愛する者を守る為にあの日誓った。

私の命はあなたに捧げましょう、と。

止血しようとキハの手が触れる。
でも、当然のように血は止まる事はなく。
何度やっても滲み出て、布は赤黒く染まるばかりだった。
――――――この血が止まる事は、もうない。
キハの手を掴み、制した。

「――――――サリャン……？」
「かつての、私は……人を殺める事が全てでした……。命令されるがままに、人を殺し続け――――。ただそれだけの毎日で……
……私には何も、心さえもありませんでした。感情も何もない、人という名のただの抜け殻でした。……キハ様に出逢うまでは。あなたの存在が何もなかった私に、心をくれました。……知っていま

したか……？」
「もう、聞きたくない……そんな…最期みたいな事っ」
「無だった私にキハ様は温もりをくれた。家族を知らなかった私に、家族がどんなものか教えてくれ……ました…」
「サリャン…っ……」

――――ああ、もう少しで。
この人の声を聞く事が出来なくなる。
姿を見る事が出来なくなる。
キハ様、と名さえも呼べなくなる。
傍に居て守る事も、もう……。

――――許されるだろうか。
手を伸ばし、キハの頬に触れる。
――――天が本当に存在するのなら、
瞳から溢れ、頬を伝う涙を拭う。
――――私の最期の行いをお許し下さい。
涙で濡れるキハの唇にそっと口付けた。
「――――――――」
唇を離し、自分の頬も涙で濡れているのに気付く。
いつの間にか泣いていた。
「……サリャ…」

「私はずっと、キハ様をお慕いしていました。私にその資格がない事も、あなたの想いがあの者だけというのも十分に承知しています。でも――――――、この気持ちを止められませんでした。どうか……お許し下さい……愛しています、キハ様……」

もう力が。
目の前の光景がぐらつき、地に倒れる……はずだった。
でも、感じた感触は柔らかかった。
倒れようとした身体がキハに支えられていた。

ずっと抱き締めたくても、抱き締める事が出来なかった。
だから、最期ぐらいは――――――――――――――――。

力の入らない手で。
キハの身体に腕を回した。
想いを持って初めて抱き締めたキハの身体はとても温かかった。

「…キハ……様、生きて下さい。どうか生き延びて……お子様を、いつの日か……成長されたお子様を見つけ出して……二人で……幸せに」
「サリャンも一緒よっ！！！私と子供とサリャンと、三人で」
「あなたに出逢えて……幸せでした……」

目に映るものは白く、呼吸も小さく。
だんだんと意識が遠のく。
かろうじて動いていた鼓動も弱くなり……。
ゆっくりと瞼を閉じた。

あなたと共に生きてきた２０年間、本当に幸せだった。

あなたと出逢うまではどうでもいいと思っていた自分の人生。

捨てたものではなかったな、と今では心の底から思っています。

――――――思い出は、どれも温かく、優しかった。

「……サリャン？」

名を呼ばれ薄っすらと瞳を開けた。

だが白く霞んでもう何も見えなかった。

「……今までの事を……思い出していました……」
「今までの……？」
「……はい、あなたとの思い出を……。本当に私は……幸せだった……キハ様……愛して……」

命の、最期の一音が鳴って、全身の力が抜けた。

「サリャン……？」
「　」
「……サリャ……っ！」
「　」
「嘘……嘘だ…。サリャンが死ぬわけ……！！起きて、サリャン！！！起きて！！！！」
「　」
「……ずっと一緒に居るって約束したのに！！サリャンっ」
「　」
「……っう…アアぁああァアアああああああ――――――――――――――――！！！！！！」

天（そら）からずっと見守っています。
だからどうか――――――――――あなたは幸せに――――――――。

夢。

人が死ぬ直前というのは夢を見るものなのだろうか。

草原に三人の人影が見えた。
小さな男の子と女の子が仲良く遊んでいる。
それを優しい眼差しで見守るキハ様の姿。

キハ様が――――幸せそうに微笑んでいる。

そうか。
キハ様はお子様に会えたのか。
あの女の子は…………誰だろうか？

何かに気付いたように不意にキハが振り向く。
――――――――え？

「　　　　　　　」

風が甘い香りを運んでくる。
「いつも傍に居てくれてありがとう、サリャン」
キハが、温かな笑顔で微笑む。

愛しています、キハ様。

あなたは今、幸せですか？

## ≪ 5 ≫（後書き）

どうも～、るきです。新・サリャン片恋物語、完結です。ドラマ観ていた方、お気付きになられました？ドラマ本編ではサリャンはキハに想いを伝える事なく死んでしまいましたよね。しかも大長老に盾にされて。……そう！この小説ではサリャンはキハに好きだと言う事が出来ました～～～（＜＿＞。）　ドラマでは言えなかったから、せめてココで言わせて上げようと思って。よかったね、サリャン……！小説、何か意味深なまま終わっています。え？サリャンが見た夢のラストの「　　」は何が入るのかって？フフ、内緒ですｖええ、そうです。察しの通り続編があります！サリャンの片恋だけで終わらせるのはちょっと切ないな～との思いからの続編です。では、次回作でお会いしましょう！

※「新・もう一つの太王四神記」に続く。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2457i/

---

☆太王四神記☆　サリャン×キハ小説　『新・サリャン片恋物語』

2010年10月8日22時02分発行